

## フォーラム報告

「フロンティア・デザイン・フォーラム  
— 『クリエイティブ・ローカル』の時代を拓く—」高嶋 正晴<sup>i</sup>，景井 充<sup>ii</sup>，中西 典子<sup>i</sup>，  
藤本 美貴<sup>iii</sup>，宮内 達朗<sup>iv</sup>，山田 大地<sup>v</sup>，塩見 直紀<sup>vi</sup>

## はじめに

2013年8月17日に、本学東京キャンパスにて、本学大学院社会学研究科の正課「先進プロジェクト研究」の教員・院生は、京都府綾部市の市民大学「綾部里山交流大学」との共催のもと、「フロンティア・デザイン・フォーラム～『クリエイティブ・ローカル』の時代を拓く～」を開催した。当日は、東京圏を中心に全国各地から、60名ほどの参加があった。以下では、フォーラムの概要として、その趣旨、プログラム、報告内容要旨、分科会の質疑・意見交換等について紹介する。なお、第4節のフォーラム報告要旨のうち、第1部の招聘講師による報告分（横田氏、藤本氏、及川氏による報告）は「先進プロジェクト研究」受講の大学院生によって執筆された取りまとめと所感であり、報告者ご本人のチェックは受けたものの、ご本人の筆によるものではないことをお断りしておきたい。

## 1. フォーラム開催の趣旨と背景

昨年来より、本学大学院社会学研究科「先進プロジェクト研究（中山間地域の社会的・経済的持続可能性に関する研究）」は、「綾部里山交流大学」と、実地調査をも含めた学術研究面での交流連携事業の展開可能性について複数回の議論を行なってきた。その交流連携事業の第1弾として、2013年8月17日（土）に立命館大学東京キャンパスにて第1回「フロンティア・デザイン」フォーラムを開催することで合意した。

「綾部里山交流大学」は、2007年度より、京都府綾部にある綾部市里山交流研修センターを拠点に、NPO 里山ねっと・あやべを中心として、綾部市（観光交流課）、京都府中丹広域振興局、綾部市観光協会、京都大学農学研究科・秋津元輝研究室、半農半X研究所の6者が連携して実施されてきた「市民大学」的な事業である。

---

i 立命館大学産業社会学部教授

ii 立命館大学産業社会学部准教授

iii 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

iv 立命館大学大学院社会学研究科博士前期課程

v 立命館大学大学院社会学研究科博士前期課程修了

vi 半農半X研究所

代表は、NPO 里山ねっと・あやべ理事長でもある新山陽子氏（京都大学大学院農学研究科・教授）が、また、綾部市長の山崎善也氏が「学長」を務める。

「学科」として、交流デザイン学科、ローカル社会起業学科、ローカル情報発信学科、人生探求学科、里山生活デザイン学科、里山学科の6学科を持ち、綾部内外から講師を招聘し、年に複数回の講義を行うという形式で運営されている。

そして、このたびのフォーラムは、綾部里山交流大学としては、人生探求学科の東京での開講として位置づけられてもいる。綾部里山交流大学という取り組みのねらいは、学びを手がかりとした交流を通じての中山間地域の活性化であり、そして、それを支える人材の育成である。こうしたねらいは、まさしく、私たちが先進プロジェクト研究をつうじてのこれまでの研究調査の中で認識を深めてきた問題意識と大きく共通しており、それゆえ、このたびの事業を協同連携して進める上での共通理解をなすものであった。

したがって、このたびのフォーラムは一過性のイベントではなく、むしろ共通の問題意識のもとでの、おのおの研究実践のシナジー効果による中山間地域の社会的諸課題の把握と解明、解決をめざす長期的取り組みへの導きをなすものであるといえよう。他方、先進プロジェクト研究にとっては、こうした連携協同事業は、これまでの調査研究の成果を連携協同のもとでよりいっそう高度化、深化させていく絶好の機会であると捉えられる。そして、フォーラムそれじたいもまた、こうした一連の成果を報告・公表することで1つの社会的貢献へと連なる重要な機会ともなりうる事が期待された。

さて、「フロンティア・デザイン」フォーラムの開催趣旨は、「フロンティア・デザイン」に関する研究調査をより発展的に展開するその嚆矢となることにある。この「フロンティア・デザイン」とは、このたび私たち先進プロジェクト研究グループが綾部里山交流大学とともに中山間地域の社会的諸課題を分析・考察するにあたって新たに提起する分析的・発見的概念装置であり、2013年度から連携協同して進めていこうとしている調査研究活動の鍵をなすものである。なお、その活動の母体として私たちは、第1回フォーラムを契機として、「フロンティア・デザイン」研究会を組織している（Facebook上でグループを作成し、2014年7月現在、フォーラム参加者を中心に36名が参加中である）。

## 2. フォーラムのプログラム

○日時：2013年8月17日（土）10：00～16：30

○会場：立命館大学東京キャンパス（東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー8階）

○プログラム内容：

### 1 午前の部

1. 開会挨拶 景井充（立命館大学産業社会部）

2. はじめに：フロンティア・デザインとは何か

「綾部里山交流大学と半農半Xの観点から考えるフロンティア・デザイン」（塩見直紀）

「農山村地域の課題と可能性の観点から考えるフロンティア・デザイン」（高嶋正晴）

3. 事例報告「フロンティア・デザインの時代に向けて」第1部

事例1）「ローカル・キャリア・カフェがめざすもの」（横田親氏（ローカル・キャリア・カフェ発起人、兵庫県丹波市市会議員））

事例2）「『Re：S』がめざすもの」（藤本智士氏（雑誌『Re：S（りす）』編集長））

#### 4. 意見交換

### Ⅱ 午後の部

#### 1. 事例報告 第2部

事例3) 「『コロカル』がめざすもの」(及川卓也氏(「colocal(コロカル)」編集長, デジタルコンテンツ担当))

事例4) 明治の起業家・波多野鶴吉, グンゼ創業者に学ぶソーシャルデザイン」(山崎善也氏(綾部市長)  
※ビデオ講演)

#### 2. 意見交換

#### 3. 分科会

- ・第1分科会 テーマ「フロンティア・デザインの観点からの移住について」  
コーディネーター 景井充, ゲスト 藤本智士氏
- ・第2分科会 テーマ「フロンティア・デザインの観点からの仕事づくりについて」  
コーディネーター 高嶋正晴, 中西典子, ゲスト 横田親氏, 及川卓也氏
- ・第3分科会 テーマ「フロンティア & ソーシャルデザインについて」  
コーディネーター 塩見直紀

#### 4. 交流会

### 3. フォーラムのプログラム内容の要旨

#### 3.1 「フロンティア・デザインの時代に向けて」諸報告

##### 3.1.1 塩見直紀・報告「綾部里山交流大学と半農半Xの観点から考えるフロンティア・デザイン」(執筆担当者: 塩見直紀)

京都府綾部市で都市農村交流をおこなうNPO法人「里山ねっと・あやべ」(理事長: 新山陽子・京都大学大学院農学研究科教授)は, 2007年に「綾部里山交流大学(以下, 交流大)」を開講しました。数年前から, 里山ねっとに加え, 京都府中丹広域振興局, 綾部市観光交流課, 綾部市観光協会, 京都大学大学院農学研究科秋津元輝研究室, 半農半X研究所の6者で協議体をつくり, 運営しています(代表: 新山陽子, 学長: 山崎善也綾部市長)。

交流大には, 交流デザイン学科, ローカル社会起業学科, ローカル情報発信学科, 里山生活デザイン学科, 里山学科, 人生探求学科という他にない6つの学科あり, 地方にある「もう一つの学び舎」として, 少しずつ知名度をあげてきました。

ソーシャル系大学には, 「シブヤ大学」(東京都渋谷区)のような「都市型」のものと「農村力デザイン大学」(福井県池田町)のような「農村型」の2タイプあります。開講から7年を経て, わかったのは, コンセプトや企画次第では, 都会から農村に十分集客できるということでした。交流大のようなローカルなもう一つの大学が日本の至るところに誕生し, 連携しつつ, アイデアを競えたらと思います。

都会よりも可能性をもつかもしれないフロンティアとして地方。それを若い世代がクリエイティブにデザインしていく時代に。そんな願いを込めて, このフォーラムを行います。アイデア次第では, 地方は大きなフロンティアとなる。そのためにはどんな哲学や思想, 考え方が必要なのか。ともに学びたいと思います。

「半農半X(エックス=天職)」というのは約20年前に誕生したコンセプトです。持続可能な暮らし方を求め

つつ、課題先進国にあって、どう生きるか。20代のときに出合った難問（環境問題といかに生きるかという問題）を考え、悩んだ末、生まれたのが半農半Xという生き方でした。2003年に日経新聞に紹介されたことがきっかけで、書籍化されました。本は台湾に渡り、中国語訳され、今度は中国大陆にも広がっていきます。半農半Xというわずか4文字のニューコンセプトが生まれるだけでも、フロンティアは開発できるのです。本を手にした人は、環境問題や農、食、生き方、働き方に関心をもつ層でした。コンセプトやメッセージ次第で、集う人が異なる。未来（結果）が変わることも学びました。交流大と半農半Xは小さな事例ですが、お伝えできることも色々あると感じています。

### 3.1.2 高嶋正晴・報告「農山村地域の課題と可能性の観点から考えるフロンティア・デザイン」（執筆担当者：高嶋正晴）

本報告は、これまでの先進プロジェクト研究の成果を踏まえてのものである。内容としては、中山間地域の経済的・社会的な諸課題として、少子化と高齢化、定住人口の減少や、雇用や仕事の不足、特例合併債に依拠してきた地方財政の逼迫、里山環境の悪化などがあり、これらの結果としての地域の産業の担い手の不足、および生活の担い手の不足が大きな問題となってきたことを指摘した。こうした課題に対するソリューションとして、本報告では、「フロンティア・デザイン」というコンセプトを提起し、その意義、輪郭をプロトタイプ的に明らかにし、その可能性について端的に論じた。

#### フロンティア・デザインというコンセプト

「フロンティア・デザイン」という言葉は、私たち先進プロジェクト研究グループと綾部里山交流大学の塩見直紀氏が共同調査研究のためのディスカッションを深めていく中で生まれてきた言葉であり、造語である。この「フロンティア・デザイン」のコンセプト創造には、大きくは2つの意図がある。1つには、地方と中央との新しい関係のあり方を企図するものである。すなわち、中央主導・トップダウンによる従来型の経済開発・成長の追従ではなく、地方の風土や人、文化の個性をいかしての、地域「自律」型、地域「連携」型の関係づくりを追求することをねらいとする。もう1つには、ソーシャル・デザインやソーシャル・ビジネスといった発想を活かすということである。つまり、社会的諸課題に対して、デザイン思考やビジネス手法を援用し、創造性や持続可能性を意識したかたちでアプローチしていくことである。

#### 3つのフロンティア・ターン

こうした意図を念頭に、本フォーラムで私たちが提案したのは、3つの「フロンティア・ターン（以下、Fターンと略す）」であった。この「Fターン」という言葉も、従来よく使われているところの「Uターン」や「Iターン」、あるいは「Jターン」、そして、これらをとりまとめた「U・I・Jターン」などといった用語との対比、差別化を意図してのものである。いずれにしても、このたび提起するところの3つのFターンは、コンセプトとして完結的なものでも完成したものでもない。むしろこれからの調査・分析・考察のなかで作業仮説的にひとまずは導きとなりつつも、そうした一連の作業の中で変更・追加など、バージョンアップがなされていくような性格のものとして解している。

さて、第1のFターンは、「地域」そのものを「フロンティア」の場としてターン（転換）させることである。農山村地域の魅力、価値の再発見や再創造が鍵となる。その事例として、島根県海士町のスローガンであるところの「ないものはない」に触れた。「ないものはない」というのは、島にそもそも無いものはやっぱ

り無いという意味にも、あるいは、島で幸せに暮らすに不足するものなど何一つないという意味にも、両方の意味に取れる。詰まるところ、「だから、あるものをうまく使う、そうして満足し幸福となる」ということである。こうした含意は、海士町の第4次総合振興計画「島の幸福論」にも見て取れる。この他、経済評論家の内橋克人氏の提起する「CFE 自給圏」についても触れた。CFEとは、福祉ケアの“C”，フードの“F”，エネルギーの“E”からなり、これら3つを自給できるような地域圏の構築の重要性を説く構想である。

第2のFターンは、新しい交流・移住・定住のかたちを「フロンティア」として、そこへ「人」の流れをターン(変化)させることである。単なる「田舎暮らし」志望者ではなく、むしろクリエイティブな働き方や価値観を実現する場づくり、仕事づくりに資するような人材の誘致こそが求められてくる。その事例として、綾部市の移住者増の動向や、徳島県神山町の「ワーク・イン・レジデンス」の取り組みによる移住者増の動向などについて触れた。こうした第2のFターンを通じて誘致された人材は、次いで、仕事を通じて地域の経済を支えるだけでなく、地域の暮らしをも支える担い手となることが望まれる。そうした理解を備え、地域の問題意識を共有しうるようなI・U・Jターン者をどのように誘致し、受け入れていくのかがカギとなろう。そして、その受け入れは、必ずしも従来通りの移住・定住、あるいは交流とは異なるかたちをとるものとなるかもしれない。

第3のFターンは、農山村と都市の新しい関係のあり方を「フロンティア」としてとらえ、そうした新しい関係性へとターン(転換)させることである。報告では、定住人口減少と交流人口拡大とを踏まえつつ、まず、新しい交流のあり方に注目し、これまでの「観る」「食べる」「遊ぶ」の「るるぶ」から、「交流する」「体験する」「学ぶ」という新しい「るるぶ」(着地型観光)の事例を紹介した。次いで、消費する／される関係から、支えあう関係への変化として、地域(コミュニティ)支援型農業(CSA: Community Supported Agriculture)についても紹介した。

これらの「地域」、「人」、「農山村—都市関係」にかかわる3つのフロンティア・ターンからなる「フロンティア・デザイン」は、別言すれば、ローカルを起点に、フロンティアをクリエイティブにデザインし、ターンを仕掛ける、そういう試みであるというようにまとめることができよう。結論としては、地方でのものづくり・ことづくりを(持続)可能なものとする仕組みづくり、そして、それを担う人づくりが鍵となること、また、個々の課題を解決するだけでなく、個性ある地域のあり方、および、それら地域をつなげ連なるかたちで日本社会のあり方さえも「リ・デザイン」することを目指すものであることを論じた。

### 3.1.3 横田親氏・報告『「ローカル・キャリア・カフェ」が目指すもの』(執筆担当: 山田大地)

一人目の報告者は、横田親氏である。横田氏は、2011年に兵庫県丹波市にIターン移住をし、現在は兵庫県丹波市市会議員として活動している。三重県桑名市に生まれ、大学は本学の産業社会学部を卒業し、卒業後は大手転職支援企業に就職し、大阪で求人新規開拓や転職支援のエージェントとして活動されていた。

横田氏からは、自身がIターン移住にいたる経緯や、横田氏が発起人を勤めた「ローカル・キャリア・カフェ」をはじめとする田舎ではじめられているクリエイティブなビジネスモデルの可能性について報告していただいた。

#### 転職エージェントの経験と丹波市へのIターンの経緯

大学時代を京都で過ごし、本学を卒業した横田氏は、大手転職支援サービス企業に就職した。大阪での求人開拓や転職エージェント業務を通じて、企業がどのような人材を求めるかという点や、転職者が何に悩み

転職するののかといった、企業状況とキャリアについてさまざまな事例に接してきた。

横田氏がIターンにいたる転機となったのは、2008年のリーマン・ショックである。転職市場において、リーマン・ショックを境に、横田氏の扱う求人件数はおよそ6割減り、たとえ求人があってもそれは支援が困難な条件のもののみとなった。しばらくして景気が若干の回復を見せた時にも、寄せられる求人は法人の立ち上げに伴う海外企業からのものが顕著に多くなってきたといい、横田氏は日本における産業構造の空洞化とグローバル化に直面したという。

横田氏は、そうしたなかで、国内に求人は戻ってくるのか、海外に出て行くことができない人はどう生きて行けばいいのか、自分の仕事はこのままでいいのか、と考えるようになり、どうすれば社会は変わるのか？と考えるようになったという。

そうした中で、仕事の傍らにビジネス専門の大学院に通いながら、産業構造の海外移転に直面した当時の横田氏が考えたのぞましい社会のありかたは、ローカルな場で農業を核にビジネスとして行うことだった。そこで、自身が田舎で暮らしていくことの豊かさを発信するメディアになろう、と考えた。社会に対し都会にすることが幸せなのか？と問いかけ、田舎には資源が沢山あり、クリエイティブに付加価値を高めることでビジネスモデルがつかれることを自身が示そうと考えたのである。

そう考えるなかで、横田氏は兵庫県丹波市に移住した。丹波市に移住した理由は、丹波市の持つ農業での「丹波ブランド」の基礎的なポテンシャルの高さであった。大阪にいた時から、「丹波」の名前は耳にしており、松茸、小豆、黒豆などでブランドを持っている土地だと認識していたという。移住に際し、まずは、できるだけ市場で勝つためのブランディングが容易である地域を優先し、友人の紹介もあって、丹波市を移住先に選んだ。という。

そして、横田氏は、丹波市で次第に農業に留まらず、自身のもつキャリアを活かした取り組みを始める。

### 田舎の豊かさとそこでの「キャリア」

今回報告された横田氏の関わっている活動は、「ローカル・キャリア・カフェ」、「世界一周おかえりビレッジ」、「インキュベーションハウス・みんなの家」の3つである。

「ローカル・キャリア・カフェ」は、大阪等の都心部のフリースペースを会場に、Iターン・Uターンした人が、田舎の豊かさや働き方を「自慢する」イベントである。「田舎で暮らしているけど、めっちゃ楽しいです」ということを移住に関心を持つ人々に自慢することで、丹波をはじめとする田舎への移住の呼び水すると同時に、移住に関心のある人もつ移住へのハードルを下げるのが意図されている。参加費は1000円のみであり、利益を追求する性質のものではない。ソーシャルメディアを通じて集まった移住に関心のある人々は多いときには50人にもなる。実際に移住をした人も出始めた。

「ローカル・キャリア・カフェ」は、田舎でも楽しく働くことができる実例をみせることで、田舎でも都市部に引けを取らないキャリア形成が可能であること示している。現在、横田氏はこの取り組みのコンセプトを後任者に譲り、丹波にとどまらず全国でも同様の取り組みをはじめている。そうすることで、移住者が地域で落ち込むことがあったときに励ましてくれるつながりある人々を全国に形成し、全国の人が丹波を応援し、全国の取り組みを丹波が応援する仕組みを作ろうとしているのである。

こうしたキャリアカフェで紹介されるクリエイティブな実例として位置づけられる丹波市での移住者獲得の取り組みの一つが、「世界一周お帰りビレッジ」である。これは、世界一周してきた人を丹波市に集めて、世界を見た視点から丹波市を見てもらおうとする取り組みである。

横田氏によれば、世界一周をした若者が直面する悩みとして、帰国後に日本での「現実」に引き戻され、親などから「遊んできたんだからこれからは働け」と言われることがあるという。せっかく世界で多様なものを見、多様な価値観を得てきたにもかかわらず、それが日本のなかで活かされないのはもったいないとして、そうした人々を丹波に来てもらい、グローバルな視点から丹波市を評価してもらう場を創ったものが、「世界一周お帰りビレッジ」である。そこでは、ヨガの聖地であるインド・ラダックに似た山並みを持つと指摘した世界一周経験者の言葉から、丹波市をヨガの里として盛り上げるプランが出るなど、従来では持ち得ない発想がもたらされている。横田氏はここでも、世界一周をしてきた人の今後のキャリア相談をすることで、丹波市への移住を促進すると同時に、前職での経験をローカルな次元で活かしている。横田氏は、将来的に丹波市を世界から仕事で悩む人々が相談に来る「キャリアのメッカ」にしたいと言い、各国のキャリアアドバイザーとソーシャルメディアを通じてつながることを模索している。

移住後の取り組みとしては、「インキュベーションハウス・みんなの家」が始まった。これは、Iターン者向けに用意された古民家での生活から、地域での起業をめざすものである。昼間は働きながら、野菜等食料は農家にもらいつつ、夜の共同生活の中で起業プランを練るものである。現在、4人の若者が「みんなの家」で生活し、シェアハウス交流事業や、ツーリズム事業が起業されようとしているという（2014年7月現在、9名とのことである）。丹波市の古民家を利用したIターン者の生活拠点の確保は、若者が老朽化した古民家を無償で貸してもらい、農業を中心に自給自足に近い生活をすることで少ない生活費で生活できる「タンヴァポロ家」企画としても始められ、既存の価値観にとらわれない若者の受け入れ先となっている。

### ソーシャルメディアでのつながりと「勇氣」を生む仲間の重要性

横田氏の活動に一貫するものは、ソーシャルメディアでの発信やそこでのスピーディーなやり取りを基礎として、そこでつながりをもった人の経験を丹波市で生かしてもらうというスタンスである。それは、横田氏の前職での経験を生かしながら田舎でのキャリアを「楽しく」創造するものとしてなされている。都市部で規範化した生き方とは異なる多様で楽しい生き方を提示することで移住者を増やそうとしていることが、横田氏が丹波市をフロンティアと位置づける際の一貫したコンセプトであると言えよう。

また、横田氏は、「地域での生活が上手く行かないときに、励まされないと、その人は今度は足を引っ張る人になってしまう」とも述べ、地域での生活を支え合うネットワークの構築や、地域に対するポジティブな見方への転換を一貫して重視している。実際、キャリアカフェでの「自慢」や、そうしたことのソーシャルメディアでの対外的発信によって、移住者が自身の取り組みに自信を持って行く過程が興味深いという。それは同時に、丹波市への移住を考える人々にとって移住への判断を後押しする「勇氣」の湧く有益な情報として機能しており、その情報によって移住への心理的ハードルが下げられることで、地域の求心力が高まる正の循環を生んでいる。

横田氏は、経済的に成熟したことで「生き方に迷うことができる」日本の今日の状態は世界的に見れば稀有であり、そのような恵まれた状態の中で「勇氣」をもたらず仲間がいるたまり場ができれば、人の生き方はより多様化できる、と述べた。ビジネス性を持ちながらも「へこんでんねん」「がんばれよ」「やめといたら」などと言ひ合える「関係性」の構築のもとになされる取り組みによってこそ、ローカル・キャリアは切り開かれていくのである。

### 3.1.4 藤本智士氏・報告「『Re:S』がめざすもの」（執筆担当者：藤本美貴）

二番目の報告者である藤本智士氏は、編集事務所『Re:S（りす）』の代表を務められている。関西を拠点に、雑誌や書籍の編集をはじめ、各種イベントや展覧会の企画運営、その他プロダクトのプロデュースやアートディレクションなど、「編集」という作業を中心に据えた多面的なものづくりを展開されている。

「Re:S」という会社名は、藤本氏自身が編集長を務め、2006年の創刊から11号で休刊するまで制作された同名雑誌のタイトルから付けられたものである。日本各地を訪れ、その地域における日常的な営み——地場産業をはじめとするものづくり、食生活、各種催しなど——の現場に密着し、そこから日本社会全体を変えていくような新たな価値の創造を「編集」という作業を通じて実現する。これが「Re:S」、すなわち「Re:Standard = あたらしい“ふつう”を提案する」というコンセプトに示された、主な活動の趣旨である。

フォーラム当日、藤本氏は上記の趣旨に沿って手がけられた活動事例をいくつか紹介された。以下ではまずその中から二つの事例を簡単に紹介し、その上で当フォーラムのテーマである「フロンティア・デザイン」との関わりについて考えてみたい。

#### 活動紹介①『すいとう帖』（2004年）の出版

最初に紹介されたのは、2004年に出版された『すいとう帖』についてである。先に触れた雑誌『Re:S』の創刊前に手がけられたこともあって、それ以降の藤本氏の活動およびコンセプトを支える原点となっている。

『すいとう帖』は、当時需要量が伸び悩み、次々と工場での生産中止を余儀なくされていた魔法瓶の魅力に再度スポットを当て、いわゆる「マイボトル」ブームを社会に生み出すきっかけとなった書物である。藤本氏は、当時事務所を構えていた大阪市天満地区が元々は硝子職人たちの集う地域であることを偶然知り、真空魔法瓶と真空管容器が主な製造物であったことに着目する。そしてこの地場産業の魅力と伝統を世に伝えるべく、魔法瓶に関する工業組合の事務所に足繁く通い、魔法瓶とその製造会社の歴史に関する資料を収集するなどして、『すいとう帖』を完成させた。これが全国の製造会社の重役らが一堂に会する場で紹介されたことにより、業界大手の会社の代表取締役社長との直接の接点を持つまでに至ったという。

その後藤本氏は、『すいとう帖』を引っ提げ、魔法瓶の水筒を普及させるフェアを量販店の一角などで手がけることとなった。その際、先の「あたらしい“ふつう”の提案」として、製造者たちにとっては一般的でありながらも当時の社会には普及していなかった「ボトル」という呼び名を採用した。それによって地場産業とそれを支える製造者たち、そして一般の利用者をつなぐ新たな価値、すなわち「マイボトル」の普及という生活スタイルの創造を実現することとなったという。

#### 活動紹介②フリーマガジン『のんびり』の制作

次に最近の事例として、『のんびり』というフリーマガジンの制作過程について紹介された。これは、秋田県の良さを県外に伝えることを目的としたものであり、秋田県庁からの依頼によって藤本氏らを中心に手がけ、全国に配布されている人気のフリーマガジンである。2014年3月時点で8号まで刊行されている。

『のんびり』は、藤本氏をはじめとする秋田県外からのクリエイターと、県内を活躍の場とするクリエイターとの共同作業によって制作されている。伝統産業や歴史、芸術、建築物、観光地など、様々な角度から秋田県の魅力が紹介されている。『のんびり』という名称には、秋田特有の「くっくくぐれる心配のない、豊かさに裏付けされたのんびりさ」を伝えたいという意図と、「ノンびり」すなわち「ビリではない」という二つの意味が込められている。「ノンびり」とは、経済指標的には下位（ビリ）に甘んじるかもしれないが、そうし



た相対価値による競争の基準ではなく、絶対価値の認め合いという観点から秋田県の魅力を見出すことへと社会全体がシフトチェンジしていくべきではないか、という強い思いを表すものである。

また『のんびり』の特筆すべき点として、表紙の斬新さが挙げられる。たとえば5号（2013年）の表紙では、同年3月に運用開始された東京駅—秋田県間の新幹線「スーパーこまち」を背景に、県内の酒蔵と酒販店の人たちが花見をしている様子が収められている。こうした表紙のアイデアは藤本氏とカメラマンの浅田政志氏を中心に考えられるが、その斬新なアイデアを実現するための構成員、さらには被取材者からの協力態勢を引き出すことの巧みさを感じられる。藤本氏は、そうした文章化できない編集上のノウハウやスキルを、県内のクリエイターたちに残していくことが、『のんびり』を制作していく上で重要であると述べている。すなわち、単なる文章校正のコツなどではなく、取材許可を得る方法や、被取材者の緊張をほぐし貴重な話を引き出す方法など、地方にはあまり育まれていない創造的なスキルの種を蒔き、後進を育てる作業である。

これら以外にも多数の出版物やイベントを手がけられているが、さしあたり上記二つの事例を通じて、藤本氏の活動のコンセプトが「フロンティア・デザイン」を目指す上でどのように参考となるか、若干ながら記しておきたい。

我々が重要視するフロンティアの（再）創造とは、何よりも地域的な固有性を引き出し、都市部からの抑圧的ないし収奪的な基準や価値観からそれらを解き放つことが重要である。まさにそれは、藤本氏のいう相対価値による競争から絶対価値の認め合いという観点へのシフトチェンジに他ならないといえよう。それは、戦後の高度経済成長の経験を幻想的に引きずりつつ、その延長線上としてさらなるグローバルな経済的発展を追求することが望ましいとする昨今の風潮に対し、根本的な価値の再考を迫るものである。しかし一方で、藤本氏のコンセプトは、昨今の地域活性化に関する諸議論にもよく見られる「地域のことは地域で」というやや閉鎖的なスタンスとも一線を画すものである。それは、「あたらしい“ふつう”を提案する」というコンセプトを掲げる際の、「提案する人は誰なのか？」という点に深く関わっている。紛れもなくそれは藤本氏をはじめとする編集者であり、彼らのような地域外に点在するクリエイターたちである。彼らが「編集」作業に代表される専門的なスキルを通じて地域内の資源を巧みに掘り起し、それを社会全体に向けて発信するといった、地域への開放的で横断的な関わり方が、フロンティアの（再）創造を追究する際に極めて示唆的であると考えられよう。

〔参考 URL〕 有限会社りす ホームページ (<http://re-s.jp/>) 2014年3月27日閲覧

『のんびり』 ホームページ (<http://non-biri.net/index.html>) 2014年3月27日閲覧

### 3.1.5 及川卓也氏・報告「『コロカル』がめざすもの」（執筆担当者：宮内達朗）

3番目の報告者である及川卓也氏は、株式会社マガジンハウスにて、日本各地のさまざまな地域情報を編集・発信するウェブ雑誌の『コロカル』の編集長を務められている。本報告では、この『コロカル』を制作・編集する中で出会ってきた地域の方々のこと、そして、メディアをどのようにして地域の課題解決に活かしているのかという点でお話いただいた。

#### マガジンハウスと地域活性化—『コロカル』創刊の背景—

及川氏は、20年ほどのあいだ、女性向けのファッション・ライフスタイル雑誌の『an-an』の編集部に所属し、最後の2年間は編集長として雑誌制作に関わられていた。その後、企業から依頼を受けて出版物を作成する部署に所属し、『Hanako Okayama』という岡山県の観光地、店、イベント等を紹介した雑誌を制作した。

当時は地域企業といった依頼者から盛んに、地域活性化を目的とした出版物を求められるようになり、その後やはり、他の自治体からも同じように地域活性化をテーマにした依頼がなされ、それらを受けるようになっていったとのことである。

及川氏は当初、地域活性化について観光やものづくりで短期的に外から人を呼び込む仕掛けを作り上げていくものだと考えていたという。しかし、短期的な観光では地域本来の魅力に触れられず、持続的な観光につながらない事例にも出会ったりもして、地域活性化に対する考え方が変わっていったとのことであった。『コロカル』の取材で、星野リゾートの星野社長と対談した際にも、同じく短期的な観光は地域活性につながらないと考えていると聞き、沖縄がハワイ的にリゾート化し観光客が夏にかけて増加するといったような現状に違和感を感じるのだという。むしろ、コミュニティ・デザイナーの山崎亮氏が言うように、100万人の人に1回来てもらえるより、1万人の人に100回来てもらえるような仕掛けが必要なのであり、地域の良さを活かして、20年後に地域の利益となっているような取り組みこそが大事なものであるということ強く感じるようになった、と。

そうした取組みからは、観光だけでなく、別の視点も出てくる。つまり、地域で働く、暮らすことをどう捉えるか、地域なりの方法論を考えていくことが必要となる。そのような問題意識を持ちながら、及川氏は2012年1月に『コロカル』を立ち上げた。そこで掲げたのは、「ローカルは楽しい！ローカルはカッコいい！ローカルは進化している！」というフレーズである。日本の地域にはシャッター通り、雇用不足、風土の消滅など、確かに課題が数多くあるが、その一方で、対立軸としての都市には、就職難、過重労働、ストレス社会、可処分所得の減少などの課題が山積している。しかし、改めて地域を見直してみると、地域での人々の暮らしや働き方に豊かさを感じたという、こうした背景から、上記のフレーズが生まれたとのことである。

これまでマガジンハウスの出版物は、消費型のライフスタイルを読者に提示していたが、そうした価値観とはまた違うものを『コロカル』は提示しようとしている。これまでの消費型ライフスタイルの制度の中では、若者が生きづらさを感じるようになってきているのではないかと、いう。地域に暮らすこと、働くこと、学ぶこと、いいものを残す、継承するといったことができないかという想いをもちつつ、『コロカル』では多くのコンテンツを蓄積してきている。そのカテゴリーは様々で、学ぶだけでなく、楽しく見てもらいながら、ということを意識しているとのことである。こうした『コロカル』の取り組みの中で、及川氏は、各地で、地域に対して同じような想いを持った人や同じ志で取り組んでいる人々が多いということ、増えてきているということに気づくようになったという。

#### フロンティア・デザイン的な地域づくり —山形県大蔵村の取り組み事例—

こうした取り組みの事例として、山形県大蔵村のことを紹介された。そこでは肘折温泉という古くからの温泉がある。及川氏によれば、この大蔵村では、地域の学生・教員が関わり、アートでまちづくりを行うプロジェクトがあり、山形県にUターンした人々を中心に今まで地域で行われてきた仕事をどう後世に引き継いでいくかを話し合っているという。また、報告の中では、大蔵村にて山伏修行を行っている坂本大三四郎氏を紹介された。坂本氏はイラストレーターである一方、山伏として修行も行っており、その修行中に自分の中で出てくるインスピレーションをアートに活かす実践をされている方である。次に、地元の青年団に所属している早坂氏についても紹介された。早坂氏はかつてIT関係の仕事に就いており、地域に移住し、青年団として普段は地域の高齢者の仕事など地域の困りごとを手伝ったりしている。

さて、この地域には、人を呼びこむイベントとして、冬の豪雪ぶりから、雪をかき分けて地面を掘り当てる

という「地面掘り大会」というのがあり、例年30組100名ほどの多くの人々が訪れているとのことである。興味深いのは、こうした大会がよその地域では無いということに気づき、自分たちの地域なりの伝承などを新しい目線で見直し、活かしていくことで、人を呼び込めばいいと考えるようになったことである。及川氏によれば、このような事例は大蔵村に限らず全国にいくつもあり、そうしたことから、各地に同じような指向性、考えを持った人が増えてきたのではないかという気づきを得たという。

### 『コロカル』にみる地域情報発信の現代的意義

及川氏は、『コロカル』編集の中で、マネー資本主義の競争原理、価格競争や化石エネルギー依存という流れや、高度な分業体制によりシステムが巨大化して自分たちの手の届かないものとなっていると感ずることがあると語る。とくに東日本大震災の中での東京電力の動きから、企業の無責任の体制の怖さを感じたという。こうした都市地域、システムに対して、地域はかつて高度経済成長期をつうじて人を送り込み、また、モノはマーケットとして都市から流れてきて、その結果、日本の地域は均質化してきた。及川氏は、こうした一連の側面が地域の課題となっているが、他方、地域の中に課題解決の希望があるとする。すなわち、この巨大システムを都市部で誰かが解決することは難しいが、コミュニティのレベル、地域のレベルから、小さい人間関係を基点に変えていくことは可能なのではないか。これがフロンティア・デザインの希望というか、取りうる唯一の道かもしれない、と示唆する。

また、及川氏は、『コロカル』が果たす役割に関しても、こう言及する。『コロカル』はメディアという役割を担っているが、一つの地域に根をおろして深く関わるのが難しいという限界がある。なぜなら、短期間で取材して記事にしていくために、関わりが薄くなってしまいがちだからである、と。しかし、取材を通じて自分たちが知った部分だけでも、それを一生ごととして取り組まれている人々の想いを損なわないように伝えていくこと、これが『コロカル』の役割であるという。また、外部の者である自分たちが地域の取り組みを紹介することで、地域に住む人々に何らかの気づきを与えたり、自信を持ったりするきっかけになれば、と及川氏は述べた。

都市部では仕事が見つからず失業している人がおり、地方では、地域で働いて、地域を盛り上げていく人が見つからない。そういうマッチングの点でもメディアの力を活かせるのではないか。そのためには、地域で暮らす、働くことについての新しい形、楽しい形を伝えていくことが大事だという。すなわち、地方の伝統的な暮らしだけでなく、SNSなどの今までのテクノロジーを駆使しつつ、リアルで楽しい実践をシェアできればよいのではないか。まさにここに『コロカル』の取り組みが有する大きな意義が見出されよう。

以上のように、メディアを通じての地域情報の発信は単なる発信に終わらない、いわば、社会変革を視野に入れての、しっかりと意図された発信という新しい段階に進んだといえ、こうした新しいレベルでの情報発信のあり方は、地域にとっても、都市住民にとっても、また日本社会全体にとっても大きな変革可能性を持っているといえる。及川氏が述べたように、ここに紹介したような地域から始まる社会課題の解決取り組みがフロンティア・デザインであり、いずれはこのような地域やコミュニティのレベルから物事を考え、変えていくという流れが当たり前のものとなっていくのではないだろうか。その流れのなかで人々の新しい生き方・暮らし方・働き方が形をとり、価値観は大きく変化していくだろう。及川氏は本報告の最後にこう述べた。「あえてローカルをフロンティアに位置づける」とか、「あえてローカルを進化していると位置づける」とか、私たちは今「あえて」という打ち出し方をしているが、そうしたことをしたり言ったりする必要のない時代がまもなくやってくる、と。私たちはこの言葉に大きな励ましを得た。

[参考 URL] 『コロカル』 ホームページ：(<http://colocal.jp>) 2014年6月20日閲覧

## 3.2 分科会の概要

### 3.2.1 第1分科会 テーマ「フロンティア・デザインの観点からの移住について」、コーディネーター 景井充，ゲスト 藤本智士氏（執筆担当者：藤本美貴）

第一分科会では、藤本智士氏をゲストに迎え、「フロンティア・デザインの観点からの移住について」をテーマにワークショップを行った。

まずは参加者全員に、①農山村地域への移住に関心を抱く理由や、②移住を考える上での悩みや疑問点などを自由に書き出してもらった。①に関しては、都市での生活や文化に対して限界や疑問を感じたから、あるいは都市に暮らしてはできないことをやってみたいから、といった意見が大半を占めた。具体的には、「企業や組織に依存しないで生きていける人生にしたい」「消費一辺倒の都市での生活、あるいは都市中心の価値観から離れたい」「新鮮で安全な食材を自らの手で育てられる環境に移り住みたい」といった意見が挙がった。そして②に関しては、移住先の選定、移住先での役割（仕事）、そして移住先との関係の構築といった諸点について、率直な悩みや疑問が打ち明けられた。具体的には、「何を決め手にして移住地域や住処を選べばよいか、その探し方がわからない」「移住先で自らが果たすべき役割とは何か、あるいはフロンティア精神で自ら何らかの仕事を作り出すことは可能か」「移住先の人々とうまくやっていけるか、地域に溶け込むにはどういった素養や経験が必要か」といった意見が挙がった。いずれも、今回の「フロンティア・デザイン」という共通テーマを持つポジティブな雰囲気とは別の、ある種の切実さを帯びた内容であった。

次に我々は、上記の諸内容をめぐって参加者相互での自由討論を行い、そのつどゲストの藤本氏よりアドバイスを意見をもらうという形をとった。ある若年の参加者からは、①に関して、自身の現在の境遇を踏まえての、より切実な心情が吐露された。プライバシー上、具体的な記述は避けるが、それは昨今問題視されている、若年層をめぐる過酷かつ不安定な就労・労働の実態と深く関係する内容であった。消費一辺倒の都市一主には首都圏を指すが、での生活に加え、過酷かつ不安定な労働状況が続く中で、人との関わり合いまでもが希薄になってきた。こうした、人間をまるで大量生産できる「モノ」のように扱う都市での空虚な生活ではなく、新たな人間観（いわゆる『人材』ではなく『人財』という価値観）でもって迎え入れてくれるような田舎での暮らしに憧れを抱いている、と当参加者はいう。藤本氏も含め参加者全員でこの意見に深く共感しつつ、では移住を実現可能なものとするためにはどうすればよいか、②に挙げられたような不安や疑問はいかに解消されるべきか、ということについて、次に議論は及んだ。

とりわけ移住先での役割や仕事、および移住先の人々（先住者）との関係構築について、議論が集中した。ある年配の男性参加者からは、「田舎に移住したはいいが、自ら積極的に何らかの役割を果たさなければ村八分に遭ってしまうのではないか。田舎での独特のコミュニティに入り込むことはできるだろうか」という意見が出た。それに対して藤本氏は、「向こうからあらゆる仕事が勝手に舞い込んでくるので、自らの果たすべき役割について考えすぎる必要はない。また、確かに田舎は閉鎖的で、悪い噂は一瞬で広まるし喧嘩も多い。だが都会と違うのは、喧嘩した人と、次の日にも顔を合わせねばならないという点である。（ポジティブに考えれば）喧嘩別れのような結果になることはないし、喧嘩しつつも毎日顔を合わせる中で、信頼関係が強まることも十分考えられる」と述べられた。他の年配の参加者からは、「都会と田舎では生活のリズムが違うので、ついて行けるか不安だ」という意見が出た。それに対して藤本氏は、「田舎では労働と余暇との線引きがないので、確かに田舎とはリズムが違う。農業をする場合も、時間や曜日に関係なく、常に農作物を気にかけてい

なければならない。ただし、ずっと労働状態にいるわけではないので、都市的な余暇に対する考え方から良い意味で脱却できるのでは」と述べられた。またより率直な疑問として、「田舎暮らしで本当に自給は可能なのか」という意見も出た。それに対して藤本氏は、「かつては自給自足の生活こそが田舎暮らしの醍醐味だったが、とりわけ田舎への移住が活発な今では、そうした人たちが自給自足をすることは確かに難しい。しかしそこは、先住者たちとの技術の交換を積極的に行うことが重要ではないか」と述べられた。筆者は、そうした技術の交換が、地域住民との関係構築の重要な糸口ともなり得るだろうと感じた。

そして移住先の選定という点に関しては、次のような意見が出た。それは「一度移住先を決めてしまうと、そこにずっと住み続けなければならないのではないかと思ってしまう」というものだった。これに対しては、他の参加者より、「ずっとそこに住み続ける」ということを必ずしも前提にする必要はないのではないか。（何年か置きに）田舎を転々とするということも、これからの移住のやり方の一つとなるのではないか」という意見が出た。確かに今は、「移住から定住へ」というプロセスが必然的な流れとなっている。だが逆に、この必然的なプロセスが、これから移住を考える人々の悩みの種ともなっているかもしれない。農山村地域にとって「定住人口の確保」は至上命題とされているが、果たして「定住」「永住」が望まれるべき唯一の生活形態であるかどうか、大いに議論の余地があるだろうと筆者は考える。

やや雑駁な記述となってしまったが、以上が第一分科会でのやり取りの素描である。先述のように、都市から田舎への「移住」というテーマをめぐるには、さまざまな不安や切迫感が渦巻いていることに、今回改めて気付かされた。そのような不安を可能な限り事前に払拭し、移住生活に関する様々な情報へと容易にアクセスできる環境を整える必要があると、筆者は切に感じた。

### 3.2.2 第2分科会 テーマ「フロンティア・デザインの観点からの仕事づくりについて」、コーディネーター：高嶋正晴、中西典子、ゲスト：横田親氏、及川卓也氏（執筆担当者：宮内達朗）

第2分科会では、「フロンティア・デザインの観点からの仕事づくりについて」をテーマにワークショップを行った。実際に兵庫県丹波市にIターンされた横田氏の話や、コロカルの及川氏が取材の中でみた地域の実例をもとに、地域での働き方、移住者の地域への入り方などが話し合われた。

まず、参加者全員で「地域での仕事づくり」について考えていることを書き出し、共有した。「地域での仕事の見つけ方」「全く知らない地域でどのように働いていけばいいのか」「地域の人たちとうまくやっていくにはどうすればよいか」という内容が多くみられた点が特徴的であった。そこから、横田氏のIターン経験の話をもとに議論が進んでいった。

横田氏は、移住者が地域で仕事・雇用を考える際に大事なポイントを3点挙げた。まず、自分の今の仕事をどう使っていくかである。2点目は、今の仕事にこだわらないということである。3点目は、固定費（生活費）をいくらに設定するのかということである。横田氏は以上の3点を述べた上で、地域でのニーズを正確に把握することの重要性を強調していた。地域で多くの人にヒアリングを行い、ニーズを調べていくことがまずは地域で働くことの第1歩なのだと言っている。また、及川氏は地域には人手が足りない仕事が多くあるので、小さいことからでも仕事を始めることは可能だと述べている。参加者からは、「どのようにヒアリングを行って行けばよいか」という質問がなされ、「とにかく地域のキーマンに会うことが大事。そこから地域の色々な人につないでもらう」と横田氏は回答していた。やはり地域は人と人のつながりが重要視される場だということをおまえた上での回答なのだろう。及川氏も指摘していたが、地域住民は移住者などのヨソ者を警戒する場合もあるので、地域に入りたての頃はまずつながりを作ることが重要なのである。

横田氏は、地域でつながりを作ったあとは、徐々に仕事の幅を広げ、地域内での信頼を積み重ねていくことも重要なことであると述べていた。また、及川氏は地域の伝統産業がある場合は、その職人のもとへ弟子入りするのも一つの方法であると述べており、横田氏と同じく、地域と都市をつなぐキーマンとつながりを持つことが大切だと指摘していた。

地域での仕事の話から、具体的な仕事の内容に話題が移った。参加者から、「地域で働く際に新しい産業を興す必要はあるのか、農業だけでは広がりがないのではないか」という声もあり、ヨソ者として地域の中でできることを具体的な事例を交えて議論した。横田氏は主婦層へのパソコン教室等を行っており、及川氏は観光業、特にイベントにおいて移住者が地域で力を発揮していることを述べられていた。両者とも共通していたのは、小さいことから始めて、それを積み重ね、自分の仕事を形成していくことが重要であるということだ。また、1種類の仕事のみではなく、多様な分野で収入を得る働き方が地域にはあるということであった。こういった多様な職種を持つ働き方も地域ならではのあり方、将来の地域のあり方を考えた上でも必要とされる働き方であると感じた。

このように、第二分科会ではヨソ者としての地域での働き方を議論し、地域住民、特にキーマンとのつながりを持つことの重要性、多種多様な働き方が必要とされていることを確認した。この視点は、今後地域に移住する者たちにとって非常に重要な視点になりうるだろう。また、このような働き方ができてこそ、地域住民と移住者という内発的・外発的要因がうまく組み合わせさり、地域がよりよい方向にむかっていくのである。

### 3.2.3 第3分科会 テーマ「フロンティア & ソーシャルデザインについて」、コーディネーター：塩見直紀 (執筆担当者：山田大地)

第3分科会は、塩見直紀氏を講師に、「フロンティアとソーシャルデザイン」をテーマとし、ワークショップを行った。塩見氏の著書をふまえて、「半農半X」という生き方を実践する塩見氏の日常や、移住・定住についての不安が話し合われた。

「半農半X」とは、農業という営みによって自給のすべを確保した上で、農の時間サイクルのなかで、「X」に自分の「天職」を代入し生きる生き方である。塩見氏は東京での企業勤務ののち、生まれ故郷である京都府綾部市にUターンした。その際、塩見氏は自分の生き方を模索する中で、「半農半X」というコンセプトを得、提唱と実践を続けている。

こうした塩見氏の問題意識の根本には「環境問題」がある。塩見氏は、環境が持続可能であるためには、人はいつどのようにして変わるのか、を考えてきた。その中で、新たなコンセプトを言語化することの重要性を感じ、生き方としての半農半Xを着想したと冒頭に説明された。とりわけ、東日本大震災を経た現在、こうした「人はいつどのように変わるのか」という塩見氏の問題意識は極めて先鋭なものとして我々にも迫るものである。

また、このフォーラム全体のテーマである「フロンティア・デザイン」というコンセプトについても、搾取可能なフロンティアたる地域を求め続けることで維持される（ように見える）サステナビリティではなく、その地での循環のなかで自己と地域が持続可能となるありかたをもとめるコンセプトであることが説明された。

第三分科会では、こうした塩見氏のコンセプト着想にいたる背景についての質問や、半農半X的生活に関心がある人々から、移住やそうした生活に移る際の不安が語られた。

全体的に特徴的であった点は、都市部の労働環境や自然環境の劣悪さに起因して半農半X的生活にあこがれがもたれていた点である。参加者からは、現在の「正社員」の働き方が辛そうである点、東京の水・空気と

いった環境について疑問視する声が多く上がった。それらとの対比として、塩見氏の実践する生活スタイル（たとえば夜8時に就寝し朝3時に起床すること、早朝に思索するアンプラグドな時間を持つこと）にあこがれがもたれ、どうすればそうした生活に自身の生活を近づけることができるか、という声が多く見られた。とりわけ、塩見氏の提唱する、収入がたとえ少なくとも地方で農による自給の上に「天職」を営む、という「半農半X」という考え方に、現在の都市部での規範的・標準的な働き方に対するオルタナティブが感じられているという内容であった。ワークショップで出された参加者からの「みなさん仕事は楽しいですか?」といった質問や、「X」をどう見つけて行くか?という質問からも、現在の働き方や進路選択の際に働く規範的な価値観に対する根本的な疑問がもたれていることが垣間見える。田舎で90歳近い老人が農業を現役で続けている事例が話題となった時は、そうしたありかたこそ、本物のサステナビリティであるという意見が述べられた。

働き方から延長線上にある話題として、移住や半農半X的生活を実践したいと思った際に不安視される内容も、参加者の声から明らかになった。その一つは、移住先の集落との交流である。参加者からは、地方にコネクションの無い中で、都市部の住民はどのようにして地方部の情報を得ることができるのか、という不安や、地元の文化になじむことができるかが不安であるという声が聞かれた。また、どの程度の集落の限界性まで自身は耐えることができるかも不安視されていることがわかった。Xを担保する農地の確保も重要な論点であるとの指摘もあった。

「収入」についても払拭しきれない不安として抱えられていることもわかった。半農半X的生活は、仕事を見つけることが先か、移住が先かといった質問がなされた。そもそも経済至上主義的側面を強く持つ競争社会に限界を感じるために地方に移住するにもかかわらず、地域おこしを求められる昨今の地域についての議論に対する根本的な疑問も指摘された。これは、「自給自足」や「自立した地域」といった議論と、新自由主義がともすれば持ってしまう親和性を危惧する鋭い指摘であろう。

そうしたことと関連して、経済至上主義的価値観からいかに価値観を転換できるかという論点に話題は及んだ。土に触れることの良さをどう価値にしていくか、また、世の中のためになることをすることにお金が支払われる社会になってほしいという声が聞かれた。

分科会の終盤では、塩見氏が提唱する、自身の「X」を見つけるためのワークがなされた。そのワークとは、紙の上に横線を引き、分母部分に自身が活動する（したい）土地やフィールド名を書き、分子部分に自身の関心があるもの3つを掛け合わせたもの（ $A \times B \times C$ ）を書くというものである。このワークによって、固有の土地に根ざしながら、活動することの重要性が示唆される。また、自身の関心あるものを、ひとつではなく3つ掛け合わせることで、その人の持つ固有性も強調され、他者と競合しえないその人の唯一性がより高く見いだされ、自身の見いだしている「フロンティア」が浮き彫りになる。塩見氏の思想が凝縮し定式化されたワークであり、それぞれが自身のXのヒントを獲得する分科会となった。

## おわりに

今回のフォーラムは、京都府綾部市および当地で実施されている「綾部里山交流大学」の活動を軸に、過疎化・高齢化が進行する中山間地域の現状をみつめ、そこで直面する様々な課題と、それをいかに克服していくのかという方策を、皆で考えていこうという趣旨のもとで開催された。

日本最大の都市である東京で行われた本フォーラムでは、想定していた以上の参加者が東京近辺から集ま

ってこられたことに、まず驚かされた。塩見直紀氏の「半農半X」、『Re : S (りす)』や『コロカル』など有名雑誌の編集長の報告という話題性もさることながら、大都市圏に住まう多くの人々が、農山村地域の問題に並々ならぬ関心を寄せているという事実を、あらためて知ることとなった。報告後の分科会でも、若年層から中高年層にわたる参加者が、農に対する自身の経験や疑問を互いに投げかけながら、熱心な意見交換が行われた。

大都市圏での暮らしが、いかに地方の農山村と結びついているのか。この両者の接点がほとんど不可視化されている日常のなかで、盆・正月にみられる帰省ラッシュが一向にやまない現実や、ふるさと小包、ふるさと納税が進展する状況を顧みれば、その結びつきの強さは容易に理解できる。高度経済成長期における農村から都市への人口の大移動を経験した日本では、多くの人々が農山村を故郷とし、その原風景を心の糧としながら、あるいは「田舎に残した両親や家屋、墓」に思いを馳せながら、都会でのいささか窮屈な暮らしを続けてきたのである。高度経済成長期に都会へと移住した世代を第1世代とすれば、その後、都会で生まれた第2世代を経て、現在では、さらに都会生まれの第3世代がすでに成人になっている。田舎に残している祖父や祖母を呼び寄せるのか、あるいは住み慣れた田舎で最期を迎えさせるのか、古びた家屋はどうするのか、墓は田舎に残しておくのか、などの判断を迫られるのが、いまこの世代である。この意味で、限界集落や消滅集落という問題は、まさに都会で暮らす人々の問題なのである。しかしこの先、田舎に住まう祖父や祖母が亡くなり、家屋や墓もなくなって、都会生まれの第4世代、第5世代と引き継がれていくとき、都市と農村の結びつきは、個人・家族レベルではもはや存在しなくなる時代が来るのかもしれない。

近年、食の問題や環境問題が浮上し、農業や林業が見直されつつあるなかで、それを支える農山村がクローズアップされてきている。これまで農山村に縁もゆかりもなかった若い世代が、農業に関心を持ち、農村への移住を考え始めている。それは、限界や消滅といったネガティブな思考を刷新し、未来への希望を託す、まさに「フロンティア」である。農林水産省は、「都市住民の田舎暮らし等に対する潜在的な志向を具体的な動きにつなげ、地域の活性化を図っていくためには、地域の特徴や良さを活かして快適に生活できる環境の整備や、UJIターナーがその経験・技術等を発揮しながら活いきと暮らすことのできる、雇用やボランティア活動の機会の創出なども必要である。そのためには、開かれた地域コミュニティを醸成するなど、地域住民の理解と協力を得ながら新たな体制づくりが重要である」（『平成18年度 食糧・農業・農村白書』）としており、各地方自治体もまた、市町村移住定住促進制度や、職業紹介、新規就農支援、起業支援、空き家情報、空き家改修助成、暮らし体験など、あの手この手で移住・定住をバックアップしてきている。さらに、公益財団やNPOなど、移住・定住を支援する法人も拡大しつつある。フロンティアの道のりは、決して平坦ではない。根気も努力も要るし、成功事例もあれば失敗事例もある。しかしそうした様々な事例を共有し、人々の対話を重ねつつ、多様な力を結集し、フロンティアのノウハウを蓄積していくことができれば、それはやがて大きなうねりになっていくと思われる。（執筆担当者：中西典子）

「フロンティア・デザイン」という言葉は、本論で触れられている通り、「フロンティア」と「デザイン」を結合させた造語である。戦後の中央集権型経済開発の中で生じた地方の人口減少を捉えて「過疎」という言葉が生まれた。「中央」と「地方」、「都市」と「農山漁村」とのさまざまな格差が深刻の度を増していき、「地方」は蔑みの対象にすらされた。この動きは基本的に現在も変わっていない。私たちは、露天掘りの果ての廃炭鉱のごとき「地方」や第1次産業部門を、むしろ新たな開拓を待っている「フロンティア」として、持続可能な生活と文化そして産業を芽吹かせる土壌にすることはできないかと考えた。背後には、戦後日本



の収奪型経済発展・国土開発のあり方に対する、深い疑念と強い批判的意識があった。

そしてまた、そうした開拓の営みの手法として、従来のアカデミズムがとってきた調査手法や社会的介入の思想および手法とは異なるものとして、「デザイン思考」を採用しようと考えた。創造性を発揮して社会的課題の解決を図り、その営みを通じてよりよき社会の実現を目指す総合的な活動を、この言葉は指している。「田舎」を観念的に美化しつつも放置するのではなく、従来の搾取的な地域開発でもなく、地域ごとの個性や文化的・歴史的蓄積に依拠し、新たな知識や知恵をも導入して、新しい「自立」と「誇り」を生み出そうではないか。

この二つの言葉を結び付けて、「フロンティア・デザイン」という造語が生まれることとなった。ここに報告する「フロンティア・デザイン・フォーラムー『クリエイティブ・ローカル』の時代を拓くー」は、「フロンティア・デザイン」の活動そのものである

今回のフォーラムでは、「フロンティア・デザイン」という言葉の前向きな雰囲気とは裏腹に、分科会においてむしろたくさんの不安が参加者から語られたことが、個人的にはとても印象深かった。それは改めて、「やはりそうではあろう」という印象である。丹波市で精力的な活動を続けておられる横田親氏、「編集」というものの創造性を鮮やかに見せて下さった藤本智士氏、ローカリティの奥深い素晴らしさを伝え続けておられる及川卓也氏、この3氏のお話が魅力的でないということでは全くない。私たちの生活感覚や時代感覚の基本的なところに、都市と農村との、また中央と地方との間に分断と格差を作り出している力に対する、複雑な感覚と感情があるからだと思われる。

その〈力〉が最近またその姿を現し、参加者からさまざまに聞かれた不安が妄想でないことを、残念ながら確認させてくれた。2014年5月14日にNHKが「クローズアップ現代」で放映した「極点社会ー新たな人口減少クライシスー」、雑誌『中央公論』2014年6月号に掲載された「消滅する市町村523ー壊死する地方都市ー」（日本創成会議：増田寛也氏）、そしてこれらを露払いとするかのように国土交通省が発表した『国土のグランドデザイン2050』（2014年7月4日）である。それぞれについて言及する紙幅はないので、これらが指し示す方向に総括的に触れるにとどめておきたい。これら一連の動きは、「国土の均衡ある発展」というかつての“国是”が姿を消したことが話題にされている通り、現在および将来発生する地域間格差を追認し、その是正の方策は基本的に講じない、ということの意味しているのである。「自立」とは“自分でやってくれ”の謂いである。リニア新幹線で結ぶ東京圏・名古屋圏・大阪圏のメガリージョンがグローバル経済の競争場裡に臨むという構想と、「小さな拠点」形成による地域社会の“自立”とが、同じ資料の中に同居している。同じ国の中での状況かと思うほどに別世界である。地域の“自立”を目指す思想や地域活性化の活動は、いわゆる新自由主義的の全面化と意図せずして同調し、格差を孕む〈分断〉と新たな〈従属〉を〈自立〉と誤認してしまう危険性を孕んでいる。我々が「フロンティア・デザイン」がどのような持続可能社会を構想するか、「最前線は自分でつくる」中で、創造的最適解を生み出していきたいと思う。（執筆担当者：景井充）

#### 付録 山崎善也・綾部市長講演メモ「グンゼ創業者に学ぶソーシャルデザイン」

本付録は、フロンティア・デザイン・フォーラムにおいて、山崎善也・綾部市長がビデオ講演として報告された内容を要約したメモである。綾部市作成のものであるため、付録とした。なお、講演ビデオは、綾部里山交流大学を構成する里山ねっと・あやべによって、ユーチューブにて公開されている（URL: <http://www.youtube.com/watch?v=zIPq4JjSHQU>）。

## 1. 自己紹介

- ・綾部生まれの綾部育ち 高校卒業後から33年間は外（大学～銀行員～帰郷）
- ・東京、地方都市、海外経験、Uターンを決意（帰郷後半年で市長選→2期目）

## 2. 綾部里山交流大学, NPO 里山ねっと

- ・人口減少, 少子高齢化
- ・定住促進, 都市農村の交流促進
- ・田舎暮らし, 農的生活の情報発信（綾部の廃校活用跡地で開催）
- ・価値観の変化, 交流大学の東京進出
- ・“祝” フロンティア・デザイン・フォーラム開催（座学+フィールドトリップ）

## 3. 綾部の紹介

- ・歴史と伝統, 山紫水明, 里山, 京都から1時間, 盆地+由良川
- ・蚕都「綾部」, モノ作り, 生糸→繊維→金属加工→ハイテク
- ・原型は養蚕（特にグンゼ=郡是製糸）
- ・非常にユニーク（斬新）な会社, 綾部の原点がある

## 4. グンゼの特徴①

- ・徹底した地域主義, 名前が郡是,
- ・企業は誰のため? 株主, 経営者, 従業員, 取引先
- ・この地域の発展のために寄与しないと意味がない!

## 5. グンゼの特徴②

- ・株式の分散化（意識的に）
  - 一株株主（従業員, 親, 農家, 販売先など）
  - 人民資本主義（People Capitalism）

## 6. グンゼの特徴③

- ・熱心な従業員の教育
  - 従業員（女工）を預る→大切に教育し立派な社会人に（女工哀史なし）
  - （良い人からしか良い糸はできない）→表は工場, 裏から見ると学校

## 7. グンゼに関する幾つかの逸話

- ・正量取引（農家も儲からないとダメ）
- ・3つの躰=掃除をする, 挨拶をする, 履物を揃える（品質管理, 人事管理, 危機管理）

## 8. このグンゼの精神は地元企業にも影響

- ものづくり, コツコツ愚直（観光のおもてなしは苦手）
- 社員教育に熱心（面倒みの良い市民性, 品格ある町）
- 文化度高い（お茶, お花, 短歌, 俳句など）

## 9. 終わりに

- ・仕事を作る（半農半Xのブランド化→半農半Xの町）
- ・価値観の変化（若者は気づいている）
- ・綾部の中学生の意識（半数以上は一旦故郷を出たあと綾部に住みたいと思っている）
- ・是非, 綾部へのフィールドトリップを!